氏　　名	赤松（あかまつ）　さやか
学　　位	博士（芸術学）
学 位 記 号	博（芸）甲第 17 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 14 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
論 文 題 目 名	アール・ブリュットとその潮流―今なぜアール・ブリュットなのか
審 査 委 員	
	主査　教授　博士（文学）田淵 晋也
	副査　教授　Ph.D　関 隆志
	副査　教授　医学博士　梅本 守

平成20年度宝塚造形芸術大学博士学位論文審査報告要旨

アール・ブリュットとその潮流—今なぜアール・ブリュットなのか

本論文は特殊な芸術領域である「アール・ブリュット」について、その受容の歴史と問題点について論述したものである。即ち、「アール・ブリュット」がいかなる歴史的経緯を経て、概念形成がなされたかにはじまり、そこから「アウトサイダー・アート」など類似概念をもつジャンルが出現していく様相が、新旧の欧米の文献を渉猟することによって、詳細に述べられている。さらにそこから、日本における、「アール・ブリュット」について理論構築を試み、それらのうえに問題点が指摘されている。

「アール・ブリュット」の総括的学術的研究については、この概念の発祥の地である欧米においても、Michel Thévoz の「Art Brut」(1975 年刊)を嚆矢として、20 世紀の下四半期から始まったばかりであり、博士学位論文としても Lucienne Peiry の「Art Brut」をはじめとし、主に 1990 年以降から提出されはじめた研究領域である。

論文の要旨

本論文は、4章からなる第1部の「主論文」(1〜192 頁)と、第2部「アール・ブリュット関連年譜」(193〜231 頁)、第3部「個人作家紹介」(232〜285 頁)、第4部「図版」(別冊 113 頁)による4部(全297+113 頁)で構成され、さらに、「付録資料」とし、Art Brut に関する Jean Dubuffet の見解を示す重要な論説「文化的芸術より望ましいアール・ブリュット」の日本語訳全文を掲載している。

本論文の目次は以下のとおりである。

第1部

はじめに(主題設定について)

第1章 アール・ブリュット(Art Brut)とは——その意味と歴史的土壌——

第1節 アール・ブリュット(Art Brut)とは

第2節 アール・ブリュットがうまれる土壌

1 18〜19 世紀の流れ

2 精神医学との関連

3 スピリチュアリズム(spiritualism)の流行

4 Morgenthaler と Prinzhorn

5 芸術家たちの関心——児童画、フォーク・アート、精神病者の作品——

(1) 児童画
(2) 精神病者の絵
第2章 Dubuffet にとってアール・ブリュットとはどのようなものだったか
第1節 Dubuffet の経歴(1945 年まで)
1 Dubuffet の登場
2 Dubuffet の経歴
第2節 Dubuffet の第1期アール・ブリュット(1945-1948)
1 調査の開始
(1)スイス
(2)南フランス
2 『アール・ブリュット・シリーズ(une srie de cahiers de L'art brut)』の刊行計画
3 「アール・ブリュットの家(Foyer de l'art brut)」」
第3節 Dubuffet の第2期アール・ブリュット(1948-1951)
1 第1次「アール・ブリュット協会(la Compagnie de l'art brut)」
2 協会のコレクションと資料について
3 「文化的芸術より望ましいアール・ブリュット(L'art brut prfr aux art culturels)」展とアール・ブリュットの定義
4 協会の解散
第4節 Dubuffet の第3期アール・ブリュット
1 アメリカでの Dubuffet
2 アメリカでのアール・ブリュット
第5節 Dubuffet の第4期アール・ブリュット
1 ヴァンスでのアール・ブリュット(1959-1961)
2 第2次「アール・ブリュット協会」(1962-1972)
3 アール・ブリュット・コレクション(Collection de l'Art Brut)
第3章 1970 年以降のアール・ブリュット——アウトサイダー・アート、アール・サングリエ、コンテンポラリー・フォーク・アート
第1節 アウトサイダー・アートとアール・サングリエ
1 Roger Cardinal とアウトサイダー・アート
2 「奇妙な芸術家たち(Les singuliers de l'art)」展と「アウトサイダーたち(Outsiders)」展
3 Alain Bourbonnais と「規格外の芸術(Art hors-les-normes)」
4 新しい組織と活動
第2節 新しい精神医学の立場
第3節 アメリカのアウトサイダー・アート
1 コンテンポラリー・フォーク・アート(Contemporary Folk Art)
2 アウトサイダー・アート(Outsider Art)

3 グラスルーツ・アート(Grass-Roots Art) と幻視的インスタレーション(Visionary Environments)
第4節 アール・ブリュット、アウトサイダー・アートの研究
第4章 日本のアウトサイダー・アート
第1節 日本の特徴
第2節 明治以降から戦前までの日本の動向
1 宮澤賢治の「農民芸術概論」
2 精神科医、式場隆三郎の活動
3 山下清
第3節 戦後から1990年までの日本の動向
1 岡本太郎と『今日の芸術』
2 宮城まり子とねむの木学園
3 芸術家と福祉施設のかかわり
(1) 糸賀一雄の試み
(2) 八木一夫の影響
(3) 田島征三と信楽青年寮
(4) 嶋本昭三
(5) 西垣籌一とみずのき寮の絵画教室
(6) はたよしことすずかけ絵画クラブ
4 式場以後における精神医学界でのアートの試み
(1) 中川保孝と嬉野温泉病院の芸術療法
(2) 安彦講平と平川病院の絵画教室
5 草間彌生
6 世田谷美術館
第4節 1990年以降の日本の動向
1 エイブル・アート(Able Art)
2 展覧会に見るアウトサイダー・アートの受容と紹介
3 日本の「幻視的インスタレーション」
4 ボーダレス・アート・ギャラリーNOMA
5 作品の商品化
6 アトリエ・インカーブ
結論にかえて 現状における諸問題
第2部 アール・ブリュット関連年譜
第3部 個人作家紹介
1 Adolf Wlfli をはじめとする13名の「アール・ブリュット」に関連する芸術家の紹介にあてている。
2 Alose Corbas
3 Ferdinand Cheval

4 Laure Pigeon
5 Raymond Isidore
6 Henry Darger
7 Ozwald Tschirtner
8 Hans Krsi
9 Clarence Schmidt
10 Nek Chand
11 Michel Nedjar
12 Victor Hugo
13 寺下春江

第1章「アール・ブリュット(Art Brut)とは—その意味と歴史的土壌—」では、先ず導入として「アール・ブリュット」という語句の意味を、Dubuffet の当初の使用例を参照しながら解釈し、彼がこの語に託した意味の枠付けを試みている。

そうしたうえで、「アール・ブリュット」が生まれる以前の、無名の人たちが芸術とは無関係な場所、あるいは、状況、たとえば、ヨーロッパの精神病院や産業革命後に顕著となった「霊媒」の託宣などの場で制作された「作品」に対する社会的関心について、歴史的に 18 世紀に遡り文献により通覧している。そこでは、精神医学や交霊術を通じて現代芸術などの分野に「アール・ブリュット」が生まれるための直接的な土壌を認め、その概要を示している。

第2章「Dubuffet にとってアール・ブリュットとはどのようなものだったか」では、Dubuffet が初めてアール・ブリュットの探索を開始した 1945 年以降の Dubuffet の活動を中心に考察を加えている。つまり、アール・ブリュットの概念は、「アール・ブリュット協会」の設立や Dubuffet 自身の芸術家としての活動などを経ていくなかで、Dubuffet 自身の中で少しずつ変化が認められることを論証している。そして、さらにアメリカやヴァンスでのアール・ブリュットの活動、「アール・ブリュット・コレクション」の設立までの歴史的な推移のなかにおいて、Dubuffet のアール・ブリュットの概念そのものが変遷していく様態が実証的に述べられている。

第3章「1970 年以降のアール・ブリュット—アウトサイダー・アート、アール・サングリエ、コンテンポラリー・フォーク・アート」では、1970 年代以降の新しい動向について総括的に述べられている。

Dubuffet がアール・ブリュットの活動を始めてから後、1970 年代に入ると、アール・ブリュットは新たな広がりを見せるようになる。Roger Cardinal の「アウトサイダー・アート」、Alain Bourbonnais の「アール・サングリエ」といった類似した作品とその概念にたいして、個別な名称が出現する。それればかりか、「アラシン」「ラ・ファビュロズリー」といったコレクション施設や「グギング」のような精神医学と密接に結びついた施設も設立される。また、ここでは、ヨーロッパを離れ、世界的規模の広がりを見せるアール・ブリュットの一側面史として、アメリカのアウトサイダー・アートやコンテンポラリー・フォーク・アートの歴史について概観している。

第4章「日本のアウトサイダー・アート」では、日本を中心において、アール・ブリュットの範疇に入

ると思われる事象を、明治から 1945 年までの状況、1945 年から 1990 年までの動向、1990 年から 2008 年現在までの動向と3期に分け、日本のアール・ブリュットの歴史の再構築とその特徴の分析を試みている。日本において、「アール・ブリュット」や「アウトサイダー・アート」という言葉が使われるようになるのは 1990 年代に入ってからであるが、そのような作品に対する限られた人々の着目やアール・ブリュットに類似する考え方は早くも明治以降から見られることを、宮澤賢治や式場隆三郎らの活動の詳細を説明することで指摘しており。さらに、日本における近年の状況は、それが世界におけるアール・ブリュットの動向のなかで、社会福祉的色彩を特徴として示すものであることを論証している。

最後に「現状における諸問題」と題された結論では、第1章から第4章まで概観したアール・ブリュットの歴史的側面を踏まえた上で、現在の諸問題について考察し、現代におけるアール・ブリュットの意味を考察する。アール・ブリュットはその名の示すごとく、いずれにせよ芸術をめぐって発祥した概念であるが、それがこのようなかたちをとって現われたということは、結局は、「『芸術』であるとはどういうことであるか」を本質において問い、そしてまた、その関連において、「なぜ今アール・ブリュットが求められているのかについて考える」必要があることを、「アール・ブリュットの歴史」は示しているとするのである。つまり、現状におけるアール・ブリュットの問題は、現在における「芸術」そのものの問題、芸術の社会的位置の問題だというのである。それはさらに、「アール・ブリュットの作品がその作り手においてどのような意味を有しているのか」、ひいては、「それが我々に投げかけるものについて現代的な意味を見出すことができればと思う」という論者の結語に凝結する結論と今後の研究の予告となっている。

第2部「アール・ブリュット関連年譜」は、1735 年から 2008 年にいたる期間における関連事項を、文献に掲載されているものを吟味して作成したものであり、欧米関連事項と 1892 年にはじまる日本における事項を分割して、2部構成で作成されている。現在のわが国においては、これらは、未だ一貫し詳細なこの種の年表としては公表されていない。

第3部はアール・ブリュットの作家紹介であり、13 名の作家を選択し主論文を補足説明するものである。即ち、素人芸術家、精神障害者、既成の芸術家など、充分な吟味がその選択にはなされている。

第4部は主論文にあわせて作成した図版集である。主論文の流れに即して、本文の理解を助けるためのものである。

論文評価の要旨

本論文の主題は、主論文の標題に明らかなごとく、「アール・ブリュット」の受容の歴史とその特質

を包括的に論証し、その問題点を指摘することにある。したがって、「関連年譜」とアール・ブリュットの特質を示す「作家紹介」は、主論文を補完するに不可欠なものであり、「図版」もまた主論文を補足するものとして構成されている。

本論では「アール・ブリュット」について、第1章から第3章において、1945年にJean Dubuffet によって命名された「アール・ブリュット」が、いかなる歴史的経緯を経たいかなる概念をもつものであったかにはじまり、1970 年以降、そこから「アウトサイダー・アート」や「アール・サングリエ」「コンテンポラリー・フォーク・アート」など類似概念をもつジャンルが出現し拡大していく様相の経過が、欧米の文献を渉猟することによって、詳細に述べられている。第4章では、そこから日本においては、それが「アウトサイダー・アート」として、1990 年代以降現在にいたるまで受け入れられている様態が、日本においては未だこの種の研究がなされていないため、文献というよりむしろパンフレットやカタログなど各種資料から丹念に収集され、「アール・ブリュット」研究の独自の構築をおこなっている。

業績としての本論文の評価は、二点からなされるものである。即ち、第1点は、わが国においてはじめて、歴史的理論的に包括的な「アール・ブリュット」の概観を行なったことであり、第2には、わが国おける動向と現状を学問的立場から考察したことである。前者は日本における「アール・ブリュット」研究に資するものであり、後者は、世界的視野からの研究に何らかの貢献をなすものであろう。

本論文が結論とし、「アール・ブリュット」にたいして論証したのは次のようなものである。

「アール・ブリュット」は、歴史的かつ社会的に、芸術分野、精神医学分野、社会福祉分野で軽重の差こそあれ扱われてきたが、現状においてヨーロッパでは、新しい美術として、あるいは、芸術家の資料として、北米では、現代的大衆芸術として受容され、わが国ではむしろ障害者社会福祉の分野で受容されているということである。

さらにそのような現状のうえに、論者が主張する立場は、芸術分野の「アール・ブリュット」に近いものであるが、しかし、それは、「決して職業としての芸術ではなく」、「生きること」に結びつくような本来的意味における芸術を示しているというものである。

つまり、本論文の副題に示されている「今なぜアール・ブリュットなのか」は、アール・ブリュットの歴史を論述する論者の視点の立場を説明するものとなっている。結論において論者は、「今、アール・ブリュットはまさしく岐路に立たされている」と記し、アール・ブリュットはその本質を失おうとしているのではないか、そして、「現在進行形で流動しているアール・ブリュットは、日本においては、Dubuffet の考え方を、よりありのままで伝えることがまずまず重要」だとするのである。これらは、本論文が単なるアール・ブリュット紹介ではなく、独自の結論を研究を通じて論証するものであることを示している。

最後に引用参考文献については、この領域の研究では日本語のみならず、複数の外国語文献の読解は不可欠であるが、そのなかで、日本語文献および英・仏2ヵ国語ではあるが、複数語の欧米文献を直接参照していること、および、新旧の基本文献のみならず、内外の展覧会のカタログや講演会のパンフレットなどの資料を蒐集し、使用していることは、新しい研究領域であるこの種の研究では評価できるものである。殊に 1997 年に刊行された L. Peiry の「Art Brut」のみならず、J. Dubuffet の研究家 Laurent Danchin の「Art Brut — L'instinct créateur」(2006 年)など最新の

研究業績を吟味していることは、必要不可欠であり、かつ、このような分野の研究者の姿勢としては重要であると評価できる。

ただし、資料の吟味と読解において若干の瑕瑾なきにしもあらずであるが、研究領域としては未だ未開に近いこの種の研究では止むを得ぬところであり、自立した研究者としての資格審査を兼ねる、博士課程修了論文としては、充分の評価ができるものである。

なお、当該申請者は、公聴会において論文内容について周到な知識をもつことを示したが、別途おこなった口頭試問に際しても、他の関連研究、および、該当する美術史の分野に関する専門知識においても十分な学識を有すると認められた。

以上を総合して、本研究論文は、博士後期課程修了を証する、博士（芸術）の学位に値するものと認定する。